

2020年12月27日
降誕後第1主日
東京聖三一教会

イザヤ 61:10-62:3
カラテヤ 3:23-25、4:4-7
ヨハネ 1:1-18

その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである

この世の光として来られたイエス様の平和が、皆様のご家庭に満ち溢れますようにお祈りいたします。

アメリカ・フィラデルフィア聖公会のオルガニストであるフィリップス・ブルックスという方についてのお話です。彼はこの世には音楽家として知られていますが、後に聖公会の司祭になってボストン・トリニティ教会の牧師として勤めたこともありました。私たちの教会も英語で「トリニティ・チャーチ」と言いますし、ブルックスが務めていた教会も「トリニティ・チャーチ」であるということに何がしかの縁を感じます。

ブルックスは1865年のある日、イスラエルの聖地巡礼に出ていきました。そしてイエス様がお生まれになったことで知られるベツレヘムの馬小屋の場所を訪ねました。残念ながらイエス様がお生まれになった馬小屋は痕跡もなく消えており、その代わりにそこには正教会が建てた記念教会がありました。これは世界で最も古い聖堂の一つであるイエス聖誕教会です。ブルックスが訪問した日がちょうどクリスマスの前夜で、そこではろうそくをともしたまま、聖餐式が行われていました。ブルックスはこの聖餐式で独特な経験をしました。この世界が静かで暗かった2千年前のベツレヘムで起きた出来事が、まるでその場で再現されたかのような感じでした。その日は、晴れた空に雲一つもなく、星の光がきらめく静かで聖なる夜でした。ブルックスはその日、あまりの感激に一編の詩を残しました。それは、聖歌集に載っている聖歌85番と86番の聖歌「ああ、ベツレヘムよ」の歌詞です。歌詞の最初の節を見てみましょう。

「ああ、ベツレヘムよ、などかひとり、星のみ、匂いて、深く眠る、しらずや今宵、暗き空に、とこよの光の、照りわたるを」

この聖歌の元の歌詞は、夜空の星は輝いて、この世の人々を照らしているにもかかわらず、この世の人々は眠っていたり、世のことにはまっていたり、神様がこの世の光として来られたことを忘れていないかと問いかける内容です。さて、ブルックスが感激で胸いっぱいになったのは、輝いている星と聖餐式の荘厳な雰囲気のためだけでしょうか。

今日、私たちが一緒に読んだ福音書の内容は、ロゴス賛歌と言われています。1960年代以前は毎主聖餐式が終わると、ともに唱えるほど信仰者に愛される聖書のみ言葉です。この内容は、ヨハネが自分の信仰的な体験を詩的に表現したものとして、イエス様の誕生の意味を含蓄的に教えてくれています。つまり、神様が初めからみ言葉としておられ、そのみ言葉が私たちと同じ姿をとり、肉体となってこの世にいらっしゃる、私たちはその方によって命を得、その恵みの光となってこの世に打ち勝っていくという内容です。

ところで、このような表現は何だか理解し難いのです。それで私は今日皆様にイエス様がこの世にいらっしゃった出来事の意味を教えてくださいたいと思います。ヘルマン・ヘッセ(Hermann Hesse)というドイツの作家が書いた「二つの童話のあるクリスマス」というタイトルのエッセイの中に出てくる短い文です。ヘルマン・ヘッセがクリスマスの直前に自分の孫からもらった手紙であり、短い童

話でもあります。ヘルマン・ヘッセの孫から送られた手紙はこのように始まります。

おじいさん、こんにちは。私が短い童話の一つをお聞かせします。

タイトル:神様に感謝します。

パウロは信心深い少年でした。パウロはすでに学校で神様について多くのことを学びました。パウロは今、神様に何かプレゼントをさしあげたくなりました。パウロは自分が持っているおもちゃを全部見てみました。けれども、気に入るものは一つもありませんでした。まもなくパウロの誕生日です。パウロはおもちゃをたくさんもらいました。その中に1ターラーコインがありました。(この1ターラーコインは神聖ローマ帝国の大型銀貨です。)瞬間パウロは興奮して大声で言いました。

「これを神様に贈り物として差し上げるぞ。神様がこのターラーをご覧になって、持って行かれるように、野原に行って一番良いところを選らぼう。」

パウロは野原に向かって行きました。野原に着いたとき、パウロは腰の曲がった貧しいおばあさんを見ました。パウロは悲しくなりました。そこで、そのターラーをおばあさんに渡して言いました。

「これはもともと、神様に差し上げようとしたものです。」

童話はこうして終わり、続いて手紙もこの言葉で終わります。

「おじいさん、さようなら。ジルバ・ヘッセより」

皆さんはこの短い童話をお聞きになってどういう感じがしますか。私が、この物語が光として来られたイエス様を説明してくれる童話であると申し上げるのは、この物語を読んで私の胸が温かくなったからです。けれども心が温かくなったのは私だけでしょうか。

「エネルギー変換」という言葉があるでしょう。この「エネルギー変換」という言葉は、光というエネルギーが運動エネルギーになったり、熱エネルギーになったりすることを言います。神様がこの世の光として来られたということもこの「エネルギー変換」が人々の心の中に起こると似ています。つまり、光エネルギーが運動エネルギーや熱エネルギーに変換するように、神様の光がこの世を照らし、人々の心を動かし、時折喜びとなり、時折恵みになって変わっていくということです。神様の光がヘルマン・ヘッセの孫に差し込むと、ヘルマン・ヘッセの孫の心が動き、腰の曲がった貧しいおばあさんに喜びを与え、その光が私たちに照らされ、私たちの心まで温かくなったのです。それで私はこの短い物語が、「神様がこの世に光として来られた」ということが何を意味するのかを教えてくれるお話であると申し上げるわけです。

考えてみると、人生の現実ヘルマン・ヘッセの孫の想像のように、科学で説明する必要がないほど単純でもあります。ですから、理性を通して理解することより、心を通して理解しようとするれば、容易く分かります。そして心が動く通りに体を動かしながら生きていくのが人生をより豊かにしていくこともあります。私は、このような真実が、イエス様が「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」(ヨハネ 8:12)とおっしゃった時、さらにはっきりしたと思います。そして、イエス様が弟子たちに「あなたがたは世の光である。」(マタイ 5:14)とおっしゃった時、私たちの人生も光の人生になるのだということが分かるのだと思います。

今日一緒に読んだイザヤ書のみ言葉は、光の人生を生きる信仰者の喜びがこのように記されています。

「わたしは主によって喜び楽しみ／わたしの魂はわたしの神にあって喜び躍る。主は救いの衣をわたしに着せ／恵みの晴れ着をまとわせてくださる。」(イザヤ 61:10)

このような信仰の喜びは、この世の光として来られた神様を理解し受け入れる人々に与えられる喜びであり、今日を生きる私たちが享受する喜びでもあります。

最近、コロナの感染者がさらに増え、多くの人が不安を感じています。経済的に苦しんでいる人も増え、コロナの状況がどうなるのか、先の見えないトンネルに行くかのように漠然と感じられることもあります。けれども、いくらこの世の中が暗く厳しくても、私たちには希望があります。それは、いくら世の中が大変でも、神様が私たちと共におられるから勇気を出すことができるというのです。サンテグジュペリという作家は、「星の王子さま」という童話でこの信仰をこのように表しました。

「砂漠がきれいに見えるのは、どこかに井戸を隠しているからである。」

砂漠の中には井戸だけがあるわけではないでしょう。そこに神様が共におられます。そしてこのような信仰があるから、信仰者は砂漠を渡ることができるし、どんな試練も乗り越えていくことができるのです。ですから、光としてこの世に来られた神様に対する信仰を堅固にし、神様に頼って生きていきましょう。神様は私たちの人生を恵みの人生に変えてくださり、祝福も与えてくださるでしょう。

この一週、光として来られた神様の恵みと祝福が、皆様と皆様のご家庭に満ち溢れますようにお祈りいたします。